

集団の中で「主体性」を育むために園ができること

これからの社会を生き抜くために、保育や幼児教育における「主体性」の育成が求められています。では、主体性はどのような環境で育まれるものなのでしょうか。園の中での友だちや保育者との関係を踏まえ、主体性の育成について考えます。

園長先生との座談会

生涯にわたって成長を支える「主体性」を仲間との関わりの中で育む

現場の園長先生から、「今の子どもは主体的に活動する姿が少ない」といった声が聞かれます。背景には保護者の意識の変化や少子化による子ども同士の関わりへの減少などがあると考えられます。現在の子どもを取り巻く環境を踏まえ、園はどのように主体性を育むとよいのでしょうか。

自分本位ではなく、周囲と協調し自己発揮できる力を育てたい

橋村 長く現場に携わってこられた経験から、いかに子どもの主体性を育むかをお話しいただきたいと思います。最初に、主体性とはどのような力や気持ちを指すとお考えをお聞かせください。



江東区白河かもめ保育園
(東京都・公設民営)
園長
浅村都子
あさむら・みやこ

聞かせください。

東 4・5歳になると、友だちの思いを認めたくて、「自分がどのようにふるまえば、もっと仲間と楽しく過ごせるか」といった役割を意識して行動できるようになります。そのように周囲との関係の中で、自分を自覚して考え行動することが主体性と考えています。

河野 「こうしたい」「こうなりたい」といった思いや意欲をもち、自分から主体的に取り組める子どもを育てることを目指しています。ただ、いくら主体的に自己発揮できても、仲間と一緒に生活しているのですから自分本位は認められません。主体性とは、周囲の状況を踏まえて自分が何をすべきかを考えて行動することだと思います。

浅村 主体性を短い言葉で表すと、「自分で考えて判断して行動できること」になると思います。具体的な

姿に置き換えると、子どもたちが発想をもち寄って「ごっこ遊び」を展開させていく場面は、一人ひとりの主体性が発揮できて遊びが深まっている好例だと思います。

橋村 お話を総合すると、主体性は、仲間の中での自分の立場を踏まえ、意欲をもって自分を発揮することと言えそうです。それでは、幼児期に主体性を育むことは、どうして大切なのでしょうか。

東 幼児期に主体的に遊びや生活に取り組む中で、生涯にわたって学んだりの、集団生活を送ったりするうえでの基盤が形成されると考えています。その点で、保育の中で主体性を意識することはとても重要です。

河野 そう思います。自分から取り組んで新たな気づきや発見があると、学ぶおもしろさを知り、探究心や知的好奇心が育ちますし、友だちと一緒に活動をつくり上げる体験を



美晴幼稚園
(北海道・私立幼稚園)
園長
東 重満
あずま・しげみつ

通して、人と協力することの大切さを学びます。そのようにして育った根っこは、小学校での学習でも意欲につながると考えています。

よかれと思った配慮が過剰な援助になっていないか

橋村 読者モニターへのアンケートでは、「今の子どもは、主体的に活動する姿が少ない」という声が寄せられています。主体性を育むという観点から子どもを取り巻く環境

も影響が大きいと思いますが、その点で課題があれば、ご指摘ください。
東 生活経験の不足から、主体性が育ちにくいと感じることがあります。実体験がないと、先が想像できず、自分から取り組むことが難しくなるためです。特にケンカやケガなど偶然に起きる体験を積み重ねることで、予期しない出来事にも自力で対応できるようになるものです。ところが、子育て支援センターなどの設定された場では公園などのオープンな場と違い、子ども同士のトラブルが発生しそうになると、大人がすぐに手を貸してしまい、ケンカをする機会が減っています。子ども同士が仲良くすることを求め過ぎ、ケンカなどを避けようとする最近の社会の風潮が背景にあると感じます。

河野 大人がよかれと思っていることが、子どもにとっては過剰な援助である場合があります。失敗は「負の体験」という考えから、先回りして環境を整え過ぎたり、失敗を叱ったりすると、子どもは「言われた通りにした方がいい」と考え、主体性

の芽が摘まれてしまいます。そうした傾向は保護者だけにあるのではなく、何かをしてあげることが保育者の役割と若い保育者が考えていることもあります。大人自身がそのように育てられたことがひとつの要因でしょう。また、現代の風潮なのか、保護者と保育者の双方に、「待つよりも自分でやってしまった方が早い」と、効率を重視する傾向もあると思います。

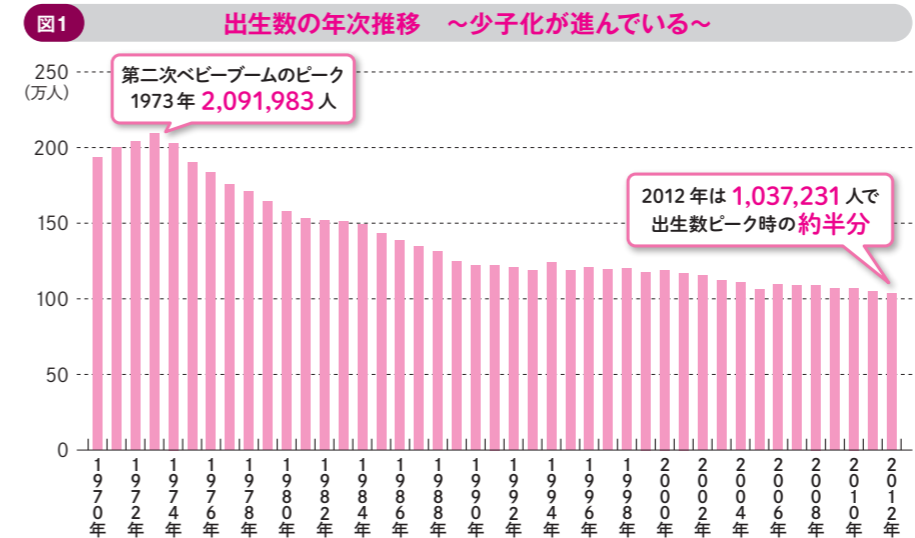
浅村 保護者が子どもの発達過程をきちんと理解していないと、自分が親に育てられたようにしか育てられません。それでまわりの子どもを見て、「わが子には何か足りないのではないか」と不安になり、習い事に走るといった状況が見られます。生活体験が不足すると、遊び方や人との



品川区立伊藤幼稚園
(東京都・公立幼稚園)
園長
河野由紀子
このの・ゆきこ



「これからの幼児教育」
編集長
橋村美穂子
はしむら・みほこ



※出典：厚生労働省「平成24年（2012）人口動態統計」
注：1970～1972年は沖縄県を含まない。



関わり方がわからず、自分から何かをしようという気持ちが起こりづらくなります。

河野 少子化も考慮する必要があるでしょう。遊びは、環境を与えただけでは生まれません。遊び方がわからないときは少し先の道筋を大人が見せ、「そうすれば楽しくなるのか」と子どもが気付くことも大切です。昔は、近所の異年齢のグループの中でそのような遊びのヒントが得られやすかったと思います。

まず子どもの存在を認め 安心して自分を出せる環境を

橋村 次に主体性を育むためには、どのようなことを大切にするとよいかをお聞かせください。

河野 子どもは、安心できる状況の中で、自分らしさを発揮します。まず保育者が子どもの思いや考え、言い換えれば、子どもの存在そのものを認め、安心できるようにすることが出発点だと考えています。

東 同感です。生活や遊びの中で、子どもの思いが認められ、侵されないことは大事です。それは保育者と子どもだけではなく、子ども同士の関係の中でも言えることです。子

もの人間関係を築くためには、まず保育者が子どもたちを十分に認めることが必要です。

浅村 友だちを認められるようになることは、この時期の大切な成長ですよね。そこから思いやりの心が育ちます。日常的に保育者から認められる経験を積み重ね、次第にほかの子どもを認められるようになるのだと思います。

仲間から受ける刺激が 次の活動への意欲を生む

橋村 子ども同士の認め合いがキーワードとしてあげられました。集団で活動することの良さを教えてください。

東 子どもが「自分（自分たち）が主人公」だと思える経験を重ねることが、主体性を育むうえでは重要だと思います。しかし、ひとりでは主人公にはなれません。同年代の友だちという、自分を写す存在がいることで、初めて自分を自覚できます。そして、友だちに助けられたり、お互いの長所を合わせたりすると可能性が大きく広がり、ひとりでは難しい高みに到達できることを体験的に学ぶ経験も、幼児期には大切です。

いろいろな場面で、「自分だけではない。仲間がいる」と実感できる体験をしてほしいと思います。

河野 友だちを見て「ああなりたい」という憧れの気持ちを抱いたり、友だちから認められて「もっとがんばろう」と思ったり、仲間とのさまざまな関わりから、「何かをしたい」という、まさに主体性の中心となる気持ちが生まれるのだと思います。

浅村 友だちから認められたらうれしいし、何かに負けたと感じれば悔しくて「次こそは！」という思いにつながります。関係が固定されたきょうだいではなく、年齢が同じか近い集団だからこそ得られる刺激だと思います。

オープン・クエスチョンで 子どもの考えを促す

橋村 日常の保育の中では保育者のどのような関わりが主体性を育むことにつながるのか、より具体的にお聞かせください。

東 子どもの可能性を広げるサポートが、主体性につながると考えています。例えば、適度な声の大きさで話してほしいとき、「大きい声でお話ししていいと思う？」という投げかけは、「だめ」という答えを引き出すことを意図したクローズド・クエスチョンです。それに対し、「どれくらいの声の大きさがちょうどいい？」という、答えに幅をもたせたオープン・クエスチョンは、「自分で考えて行動している」という思いにつながりやすいです。特に遊びや人間関係をつくる過程など一人ひとりの思いを大切にしたい場面はオープン・クエスチョンを意識して使っ

ています。

浅村 「大人主導になっていないか」という振り返りを、常に心がけています。保育者の言葉が多い保育は、たいてい大人主導です。子どもの思いをじっくりと探り、待つサポートを大切にすると保育者の言葉は少なくなります。例えば、散歩に行く前に、「上着を着て」「帽子をかぶって」「靴を履いて」と、いちいち指示すれば、すぐに準備できるかもしれませんが、子どもは自分で考えなくなります。多少時間がかかっても、必要な準備を自分で考えて行動することが、この時期の育ちには重要です。また、大人主導にならないように、子どもに対して「言葉をかける」ではなく、「言葉を手渡す」という意識で、子どもの気持ちを受け止めて、対話することを大切にしています。

河野 子どもの発達は、あくまで個人差が大きいことも念頭に置いています。例えば、子どもが何かをしたがっているときに、「〇歳だから、

まだ早いだろう」と、止めてしまうのはもったいないことです。

自力解決に導く援助で ケンカが大きな学びの経験に

橋村 先ほど偶然に起きる体験として、ケンカが例示されました。ケンカは主体性の育成とどのようなつながりをもっているのでしょうか。

東 友だちに共感するだけではなく、ぶつかり合いを通して学べることがあります。基本は、子ども同士で決着をつけるまで少し離れて見守るのがよいと考えますが、気持ちが高ぶって思いのやり取りが難しくなったら、双方の子どもの気持ちを受け止めながら、話の交通整理をしてお互いの思いに気づくようにしています。例えば、「Aちゃんはこんなふうに思っているんだね」「Bちゃん、Aちゃんは〇〇したことが悲しかったようだ」といったように、丁寧に気持ちをやりとりする中で、次第に自分のことと相手のこと

がわかり、解決や仲直りのきっかけがつかめます。ポイントは、子どもたちが「自分たちの力で解決できた」と思えるように援助することです。大人に解決してもらったと感じてしまうと、主体性は育まれません。「つかず、離れず、でしゃばらず」を心がけています。

まず保育者が主体性を 発揮できる環境が大切

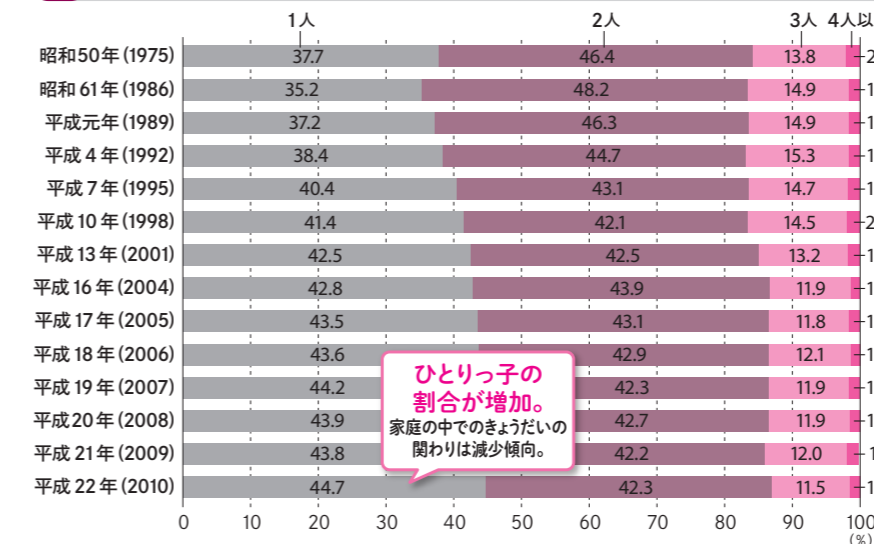
橋村 最後に保育者に対して、園長先生が心がけたいサポートについてお聞かせください。

河野 保育は、園の思い、保育者の思い、子どもの思いが絡み合い、相互作用の中でつくられていきます。その中で、保育者自身が保育を楽しむこと、すなわち保育者が主体性を発揮することは欠かせません。保育者の主体性を引き出すためには、子どもへの対応と同様、保育者も安心して自分らしさを出せる環境をつくることが第一です。そのために、園長という立場から個々の保育者のよさを認め、「思った通りにやってみなさい」というスタンスでフォローすることを大切にしています。

浅村 みんなで保育を見学して討議する研修などは、ややもすると課題を探すことに終始してしまいます。保育者同士がよさを認め合わなければやる気や主体性は起こりませんから、お互いの保育やクラス便りの内容のよいところを評価し合う研修などを意図的に実施しています。

橋村 主体性を育むことの大切さ、また具体的な関わりポイントがよくわかりました。どうもありがとうございました。

図2 「児童のいる世帯」内での子どもの数の割合



出典：厚生労働省「グラフで見る世帯の状況（平成24年）」
※「児童の有無及び児童数別にみた世帯数の構成割合・平均児童数の年次推移」の調査結果より、「児童のいる世帯」内での児童数の構成割合を算出した。

事例1 ● 保育者の言葉かけに焦点を当てて

仲間との関わりの中で思いを引き出し、 自分を発揮できるように促す

品川区立平塚すこやか園（東京都・公立幼保一体施設）

品川区立平塚すこやか園は、運動会という行事の中での仲間と力を合わせるグループ活動を通し、自分で考えて動ける子どもを育てることを目指しています。5歳児の運動会に向けたグループ活動を例に、具体的な実践を見てみましょう。保育者の言葉かけの工夫が、特に注目したいポイントです。



園長
大澤洋美先生

同じ年齢の仲間の中だからこそ 自分を発揮していける

やりたいことを見つけて行動したり、言いたいことを伝えたり、子どもが自分からいろいろなことに興味や関心を示し、アクションを起こすことを主体性ととらえ、園内で共通理解を図っています。

ただ、主体性の表れである「～しよう」「～したい」といった言動が、以前に比べて少なくなっていると感じます。保育者から遊びを提示されたり、話を聞いたりするまで、自分から動かずに待っている子どもが多くなったように思います。

今の子どもは、待っていれば、楽しいことが次々にやってくる環境で育ってきたことが一因かもしれません。少子化によってきょうだいが少ないこともあって一人ひとりに手がかけられ、子どもが困る場面が少なくなっています。また、ほしいもの

が手に入りやすかったり、習い事に通って教わるのが当たり前になっていたりすると、自分から考えたり求めたりする気持ちが起こりにくいかもしれません。

いろいろなことに興味や関心を示し、自分から考えて動く子どもを育てるために集団の中での育ちを大切にしています。園は、同じくらいの年齢の子どもが集まっているため、仲間という安心感や楽しさを味わえ、また一人ひとりの思いの違いにも気づくことができます。

さまざまな人との関わりの中で「自分はこうありたい」という思いを抱き、主体性を育めるのが、集団を生かして保育を行う園のよさだと考えています。

一人ひとりのペースで 主体性は育っていく

子どもが集団の中で力を発揮するためには、保育者との信頼関係が土台になります。保育者から認められて「自分」を確立することで、友だちを認めて一緒にがんばろうとする気持ちが生まれると思います。

そこで入園当初から「あなたのことをしっかりと見ているよ」「あなたの気持ちはよくわかるよ」といっ

たまなごしや言葉で接し、次第に「その考えはすてきだね」「ここをがんばったね」など、一人ひとりのよさを具体的に認めるようにしています。

保育者と子どもが信頼関係を築いたうえで、大事にしているのが環境構成の工夫です。「やってみたい」と思える材料や素材を身近に用意し、継続して遊べる空間や時間を保障するとともに、ときには保育者がモデルとなったりして、子どもが自分で遊びをつくり、友だちと関わりながら展開するように促します。そのような日々の積み重ねが、自ら考えたり行動したりする力につながると考えています。

ただ、成長の過程は一人ひとり異なりますから、「こうすれば主体性が育つ」という決まった方法や道筋はないと思います。保育者や友だちから認められたり、困難を乗り越えたり、仲間と息が合ったときのうれしさを感じたり、いろいろな成功体験が積み上がったとき、それぞれのペースで主体性は発揮されていくのだと考えています。

次ページでは、5歳児のグループ活動を通し、主体性を育む保育をご紹介します

主体性を育む
グループ活動のサポート
～運動会に向けた
5歳児の係活動～

あかぐみ おうえんだんの練習

活動前の状況

10月中旬に開催される運動会では、5歳児は自分で選んだ係の活動を行います。今日は自分のやりたい係で具体的に何をするか、グループ内で相談する日です。グループ活動の開始時間は自分たちで決めて取り組むことになっています。今日は、グループ活動の前に運動会で全体で行うリレーやリズムなどの活動を、少し離れた場所にある小学校の校庭で行いました。疲れている子どももいて、担任は「始まるまでに少し時間がかかるかもしれない」と感じています。

◎活動中の様子



初めは練習がなかなか始まらない

Aくん以外の子どもはやる気になって集まっていますが、Aくんは製作コーナーで空き箱製作を始めました。ほかのメンバーが練習を始めることを伝えますが、Aくんは黙って自分の活動を進めています。この様子を見ていた担任が「Aくんは練習やりたいのかな？それともやりたくないのかな？」と聞くと、Aくんはしばらく考えてから「やりたい」と答えます(①)。担任は「今はこれをやりたいんだよね。でもいつまでも、みんなを待たせるわけにはいかないよね」と伝えています(②)。

担任の気持ちを感じてBちゃんが…

その場にいた全員が黙ってAくんと担任を見ています。するとBちゃんが「じゃあ、長い針が11になったらやることにしたら？」と提案します(③)。Aくんは顔をあげて「うん、わかった」と応じます。その後、Aくんは自分がやりたかった製作に専念し、グループのほかのメンバーはそれぞれ自分のしたいことをして待っています。10時55分少し前にAくんは自分から製作の活動をやめ、応援団のことを書いたメモを持って、「練習しよう」とメンバーに呼びかけ始めました(④)。

よりすてきな応援をするために、それぞれが意見を出して…

しばらくすると、Cちゃんが「応援だけじゃ弱いし、見ている人もつまらない」と言いました。メンバーからも「小学校の運動会では、応援の歌を歌った」「踊りをする？」などの意見が出て、応援のかけ声の後に歌を歌うことになりました。ところが、歌詞の中に相手の組を応援する言葉があることにDちゃんが気づき、メンバーで意見を出し合い、結局、6年生が歌った『ゴーゴーゴー』を歌うことで全員が一致しました。応援や歌を声がそろうまで確認し合って練習をしていました(⑤)。

◎主体的な行動を促したポイント

- 担任はAくんの気持ちの切り替えに必要な行動を受け入れ、同時にほかの子どもの存在に気づくような声かけをしています(①、②)。Aくんの気持ちと行動を受け入れ、一人ひとりを大事にする担任の気持ちを感じたBちゃんが代替案として活動開始の時間の提案をしています(③)。Aくんもほかのメンバーも了解しており、友だちの提案を受け入れる関係の育ちが感じられます。
- Aくんは担任をはじめ、メンバーからも自分が受け入れられたことから安心して自分の活動をした後、自分の気持ちを切り替え、グループの活動に率先して取り組もうとしています(④)。
- スムーズに活動が進むと子ども同士の気持ちがつながります。その心地よさがもっとよくしたいという次のめあてを生み出し、そのめあてに向かっていろいろな考えを出し合うことにつながります。小学生の活動を見るという共通の経験が方向性やイメージを共通にしたり、お互いの経験を生かす力が育ってきたりしたことが、意見の一致を可能にしたと考えられます(⑤)。

「自分が決めた」と感じられるように 子どもの考えを引き出して認める

P.7でご紹介したグループ活動を行った5歳児クラスを担当する高野悠先生に、特に大切にしていた援助方法などをうかがいました。

力を合わせやすいように 運動会を共通のゴールに設定

運動会などの大きな行事は、子どもがとても楽しみにしていて、みんなが力を合わせて向かう共通のゴールになりやすいと考えています。そこで、運動会でやる係活動を設定し、ひとつの目標に向かって力を合わせる体験をして、「みんなで協力してできた」、「自分たちががんばったから運動会ができた」と実感できるようにして、自信や意欲につなげたいと考えました。

年度当初は、保育者の具体的な指示がないと動けない子どもがいて、「次は何をすればいいの?」といった言葉が聞かれました。そこで、1日の予定の掲示をやめて、自分たちで考えて動くことができるようにしてきました。

さらに4月から、ペアで話し合っ



子どもと同じ目線になって会話をし、一緒に活動に参加するようなスタンスでフォローしています。

相手の意見を聞いたり、代替案を出したりする経験を積み重ねてきました。こうした活動によって、友だちと協力することのよさを徐々に実感できたと思います。

一人ひとりの考えを引き出し 認めようで一緒に考えていく

運動会の係活動に向けて取り組む期間は2週間と長く、5~6人のグループで行うのも初めての体験で、子どもにとっては大きなチャレンジでした。すぐにグループがひとつにまとまるのは難しいと予想していましたが、自分たちでつくり上げる体験をしてほしかったため、私から「~しなさい」といった指示はしませんでした。これは私が日頃から心がけていることでもあります。

新任の頃は、子どもに「~させる」「~してあげる」という気持ちが強かったのですが、当時の園長先生からアドバイスを受けたことをきっかけに、保育者には子どもに教えるだけでなく、子どもの気持ちを引き出しながら一緒に考える、困ったときにヒントを出すなど、さまざまな

品川区立平塚すこやか園

◎幼保一体施設として0~6歳のつながりのある保育を実践するとともに、子育て支援センターとしての役割も果たしている。4・5歳児は幼保共通の「平塚コアカリキュラム」により、幼児期に必要な力を育んでいる。

園長 大澤洋美先生
所在地 東京都品川区荏原 4-5-22
園児数 141人(0~5歳児)



5歳児担任
高野悠先生

役割があることを意識するようになりました。今回の係活動では、特に、子どもの意見を認める、必要であれば違う視点を提案する、ヒントやポイントを提示して一緒に考える、一人ひとりの考えを引き出しながら、友だちにも伝えられるようにする、といった援助を強く意識しました。

子どもの意見が衝突したり活動がこう着したりする場面もありましたが、最終的に力を合わせて乗り越え、運動会を成功させることができました。その中で、子どもが「自分の力が役に立った」と感じる場面がたくさんありました。

今回の経験で培った自信を、さらに難しいことに挑戦する意欲につなげたいと考えています。今後想定しているグループ活動は、みんなで内容を話し合い、折り合いをつけながらひとつのものを作り上げていく、より高度な表現活動です。一人ひとりが仲間の中で力を発揮し、輝ける場所をつくれるようにサポートをしたいと考えています。

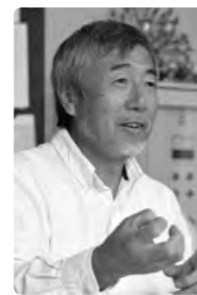


事例2 ● 環境構成に焦点を当てて

主体性を育むために、子ども自ら関わらずにはいられないような環境をつくる

宮前幼稚園(神奈川県・私立幼稚園)

遊ぶことを通して人としての根っこをつくる保育を研究し、実践している宮前幼稚園。主体性を育むという観点でも、仲間と関わり合っ



園長
亀ヶ谷忠宏先生

主体的な活動を促すために 必要最小限の環境構成に

ニートや引きこもりが社会問題になるなど、自分に自信をもてない若者が増えています。あそびが生活の大半を占める幼児期に自分の意思であそび込むことは、自信となり、主体的に生きるための基礎となります。

当園では、1年の発達を5期に分けて考えています(図1)。どの年齢も同じような発達傾向をたどると考えますが、年齢によって質が異なります。例えば、Ⅲ期の自己主張期

には、人に自分をアピールし、認められたいという特徴はどの年齢も同じですが、3歳児は見つけたものやできたことを保育者に何でも「見て、見て!」とアピールします。5歳児になると、仲間の中で自分が自慢できるものや考えについて自己主張する姿がよく見られます。このように、各期の発達をあらかじめ見通せると、それに合った環境や援助が考えやすくなります。

こうした発達を豊かに保障するためには環境構成が重要ですが、子どもの主体性を伸ばしたり、あそびが展開するコツは「必要最小限」です。子どもが工夫する余地のない環境設定では、自分の意思で自由に活動する楽しさを味わえず、主体性の育ちのチャンスを逸してしまいます。子どもの発達を把握し、興味関心を

気持ちに寄り添いながら、必要最小限の環境構成をし、「ここからは子どもの力に任せる」という時機を見極める力が保育者には求められます。

園長にも子どもの主体性を育むために重要な役割があります。そのひとつが園庭環境などハード面での環境整備です。子どもたちをひきつけ、安全を確保しながらも挑戦したり仲間と多様なあそびが展開、発展できる、あそびにはいられない魅力的な環境作りを行いたいものです。

子どもが主体的に行動し自信を深める過程では、仲間との関わりも欠かせません。子どもは、友だちや年上の子どもの姿を見て、「あんな風になりたい」と憧れを抱きます。憧れは、人がよりよく成長するための原動力です。「あんな風になりたい」と強く思った瞬間にスイッチが入り、主体的に歩み始めます。

憧れのすばらしいところは、その人への尊敬の念も内包されているところです。子ども・保育者・保護者が互いに憧れ合えれば、園の空気もいきいきとし、子どもの主体性がより伸びやかに発揮されるでしょう。

次ページでは、4、5歳児のグループ活動を通し、主体性を育む保育をご紹介します

図1 宮前幼稚園が考える 1年間の発達の流れ

I期=不安と混乱期(4月~連休明け頃)	母との分離や生活の変化などに不安と混乱を抱く時期。保育者との信頼関係を築くなど、安定につながる関わりを重視。
II期=自己発揮期(連休明け頃~6月)	ものの遊びへの興味がわく時期。集中して遊べる場所と時間を十分に確保する。
III期=自己主張期(7月~運動会頃)	先生や友だちに自分の思いを表すのがおもしろくなる。一人ひとりにスポットライトをあて、認める場をつくる。
IV期=仲間意識期(運動会後~12月)	友だちと一緒に過ごすことが何より楽しくなる。友だちと同じであることもうれしいし、自分にはないものにもひきつけられる。
V期=自己充実期(1月~3月)	自分を出しながら、相手を受け入れられるようになる。相手の喜びが自分の喜びと感じられるように援助する。

※年齢ごとに発達の質は異なるが、基本的には幼児の発達を上記のように大まかにとらえ、園内で共通理解を図っている。

5歳児クラスの
あそび

アクセサリ屋さんごっこ

あそびが始まるきっかけ

ひとりの女の子の「アクセサリを作りたい」という発言がきっかけになり、興味をもった子が集まって、アクセサリ作りを始めました。一人ひとりの「こうしたい」というアイデアが積み重なって、次第にお店屋さんごっこに発展しました。

◎あそびの様子

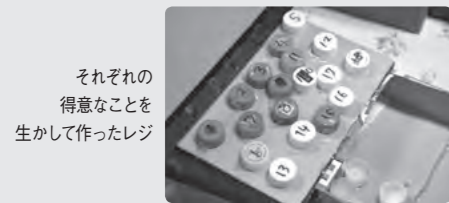


●最初に、担任がモールや毛糸、ビーズなど、いろいろな素材を用意したことで、工夫する意欲が生まれ、保護者も感心するような作品ができ始めました。作品が増えてくると、「お店をやりたい」という声が上がリ、お店屋さんを開くことに。

●子どもからアイデアを募ったり、担任が本物の指輪ケースを持って来るなどの提案をしたりして、本当のお店のように見えるディスプレイを工夫しました。当初は、アクセサリにあまり興味がない男の子もいましたが、担任が帰りの会で話題にし、「お客さんを呼ぶためにはどうしたらいいか」を話し合い、男の人用のアクセサリを作る案などが出て、興味をもって参加するようになりました。

●ほかのクラスの子どもが「アクセサリを買いたい」と見に来たため、「〇時からオープンします」というチラシを配って、宣伝するアイデアが出ました。自分のやりたいことを生かして、アクセサリを作る子ども、お客さんに似合う商品を勧める子ども、宣伝ビラを作る子どもなどに分かれてきました。

●ある子どもの「お店なのにレジがない」という発言をきっかけに、4人の子どもが空き箱でレジを作り始めました。ペットボトルのふたに数字を書いたり、お金を入れる部分の引き出しを作るなど、自分の得意なことを生かしながら力を合わせて作りました。レジ作りを発案したのは、ふだんは自己主張が控えめな子でした。主体的な思いをかたちにする援助をしたかったため、レジの土台の素材を一緒に選んだり、まわりの子と一緒に取り組めるようなきっかけをつくりました。



それぞれの得意なことを生かして作ったレジ

環境構成と
関わりの
ポイント

「もっと作りたい」「もっと売りたい」という意欲を高める環境と関わりを心がけた

5歳児担任
佐藤友佳先生



友だちとの関係が深まりつつある時期だったため、仲間とイメージを共有してあそぶ楽しさを感じてもらいたいと考え、ひとりの女の子の発言を仲間とのあそびにつなげました。その時点で、ごっこあそびに発展するだろうと予想していましたが、最初からお店屋さんごっこの環境をつくるのではなく、子どもが発案するまで待とうと思ひ、まずは製作に熱中できる環境を用意しました。

子どもたちが作品作りに満足したところで、「お店屋さんをやりたい」という声が出たため、実際にアクセサリショップに行ったことがある子どもの話を聞いたり、私が本物の指輪ケースを持ってきたりして、みんなでアイデアを出しあいながらディスプレイ作りを進めました。そのあとは、「看板を作

ろう」「レジも必要だ」「カフェも一緒にやりたい」など、さまざまな発想が出てきて、あそびがどんどん発展しました。子どもが主体的に取り組めるように意識したのが、何かを提案するときに、「先生はこうと思うけれど、みんなはどう思う？」などと子どもが「自分で考えた」と感じるような投げかけをしたことです。

男性用のアクセサリやレジを製作したり、カフェを併設したお店を考えたり、私の予想を超えたアイデアが多く、子どもたちに工夫する力やお互いの得意なことを認め、それを生かしてあそぶ力がとてもついているのを感じました。もうしばらく、子どもたちのアイデアに添って、このあそびを広げたいと思っています。

4歳児クラスの
あそび

ボウリングあそび

あそびが始まるきっかけ

砂場で塩化ビニール管をつなげて水を流すあそびがはやっていました。それを応用して新しいあそびを生み出せそうだと考え、ある日、保育室に机、透明の長い筒、紙でできた長い筒を置いておくと、担任が予想もしない方向にあそびが発展しました。

◎あそびの様子



●机は片足を倒して斜めに置き、近くに透明の筒と紙でできた長い筒を置きました。子どもたちは最初、机から筒を転がすあそびを始めました。やがて、机の下にトイレットペーパーの芯を並べ、筒を転がして倒すボウリングあそびに発展しました。

●筒を転がすと、並べた芯は一度に全てが倒れました。それを見た子どもが、「本当のボウリング場みたいにやりたい」と発言し、いくつかの筒をつなぎ、穴からどんぐりを落として、ピンに見立てた芯を倒すというアイデアを出しました。担任は見守るスタンスを大切に、なかなかアイデアが出ないときだけ、「こうしてみたら、どうなるかな」と、「仲間の一員」の意識で声をかけました。

●ピンを並べる途中で倒したり、筒がうまくつながらなかったりと苦戦し、あそびがなかなか進みませんでした。そこで担任が、練習用の机を用意したり、筒をつながれるように縄で縛る方法を教えたりして、子どものアイデアが実現する手助けをしました。子どもがイメージを実現する技術が足りず、なかなか思い通りにならない場面もありましたが、子どもがやりたいことを実現できるように支えることで、「できた!」という達成感や自信をもてるようにしました。



環境構成と
関わりの
ポイント

意欲やアイデアを認め、適切に援助することで自信や次の意欲が生まれる

4歳児担任
とのいけ
外池絵里先生



運動会を経てさらに自分に自信が付き、意欲的に試すことに楽しさを見いだす姿が見られるようになりました。ふだんのあそびに使っているものを別の環境に置けば、「これで何かをやってみよう」という新しい発想が生まれるだろうと考えました。

クラスにアイデアが豊富な男の子がいます。これまでは、その子が次々にアイデアを出し、周囲が置いていかれることがありました。しかし今回は、ほかの子がその子のアイデアに「それいいね」と言ったり、自分の考えを付け足すなど、互いに認め合ってあそびを広げていました。年度初めから、一人ひ

とりを認めるために、「その考えはすてきだね」などと声をかけ、周囲に伝えていく関わりを心がけてきました。その結果、自分への自信が育ち、友だちを認める気持ちが表れたのかもしれない。

あそびが生まれるきっかけとなる環境を用意することで、子どもからアイデアが生まれ、そこからあそびを豊かに展開していくことの大切さを感じています。今後も必要最小限の環境構成と適切な援助を心がけて、子ども同士で思いを積極的に伝えあえる仲間関係を作っていきたいです。

宮前幼稚園

◎2013年度の教育目標は、「主体性のある響き合える豊かなところをもった子ども」。あそびを中心に、「弾むところ、秩序あるところ」や「みずみずしい感性」を育む保育を目指している。

園長 亀ヶ谷忠宏先生
所在地 神奈川県川崎市宮前区野川1060
園児数 468人(3~5歳児)



インタビュー

子どもを「主体」としてとらえ、 今を認めながら未来を示す保育を

主体性とはどのようなものであり、これから未来を生きていく子どもになぜ必要なのか？
「人は育てられて育ち、人を育てることを通して自らも育てられる」という考えを基礎に
発達論を研究している鯨岡峻先生にうかがいました。

「私」と「私たち」 ふたつの心が「主体」をつくる

私たちは「主体性」「主体的」という言葉をよく使います。しかし、「主体とは何か？」と問われると、答えるのは意外に難しいかもしれません。そして、「主体」とは、よいことづくしの心の育ちのことを指すのでしょうか？ 私はそうは思いません。

そもそも、人はどういう状態が「主体的」であると言えるのでしょうか。私は、「主体」という概念には、ふたつの側面があると考えます。それは「私は、私として生きる」という側面と、「私は、私たちとして生きる」という側面です（図1）。

「私は、私として生きる」という心は、自己充実欲求に根ざしていると言えます。自己肯定感や自己主張、意欲、自信など、自分を前に出していく心が含まれます。一方、「私は、私たちとして生きる」という心は整合希求欲求に根ざしています。周囲を信頼し、気持ちがつながることをうれしく思う感情、ともに生活する構えなどがそこに含まれます。

人は誰も、心の中にこのふたつの相反する欲求とそれに根ざす心をもっています。そしてふたつの欲求のバランスがとれた状態が、主体的

な状態であると私は考えています。

幼児期の主体性の育成は 未来を生きる土台づくり

では、子どもの育ちにとって、そのような主体性を育むことは、なぜ大切なのでしょうか。

人はみな、自分の中に自己充実欲求と整合希求欲求というふたつの欲求をもっていますが、このバランスをとるのは実は簡単なことではありません。最近、日本では、自分の都合ばかりを主張するなど「私は、私として生きる」面が強い大人が多くなっている気がします。しかし、「私は、私たちとして生きる」ことばかりが強調されると、自分らしさが発揮しにくくなるのも事実です。このように、ふたつの欲求はやじろべえのようにバランスをとるのが難しいのです。

人間は「人の間」と書くように、人の中で生きていく存在です。自己充実欲求と整合希求欲求のバランスがとれるようになることは、人の成長にとって大切なことなのです。

「小1プロブレム」は主体としての心の育ちが十分ではないから起きるものだと私は考えます。特に幼児教育から小学校へと連続する中では、学力（知力）の獲得以上に、「私」と「私たち」というふたつの要素が

バランスよく育っていくことが重要です。そして、そうした主体としての心の育ちが将来、自立して生きていくうえでの土台となるのです。

周囲とつながりたいから 自らがまがができる

自己充実欲求と整合希求欲求は相反する欲求のように思えますが、互いに強く結びついているのも事実です。



中京大学心理学部教授
京都大学名誉教授
鯨岡 峻

くじらおか・たかし
専門は発達心理学。著書に『保育・主体として育てる営み』『子どもの心の育ちをエピソードで描く—自己肯定感を育てる保育のために』（いずれもミネルヴァ書房）など。

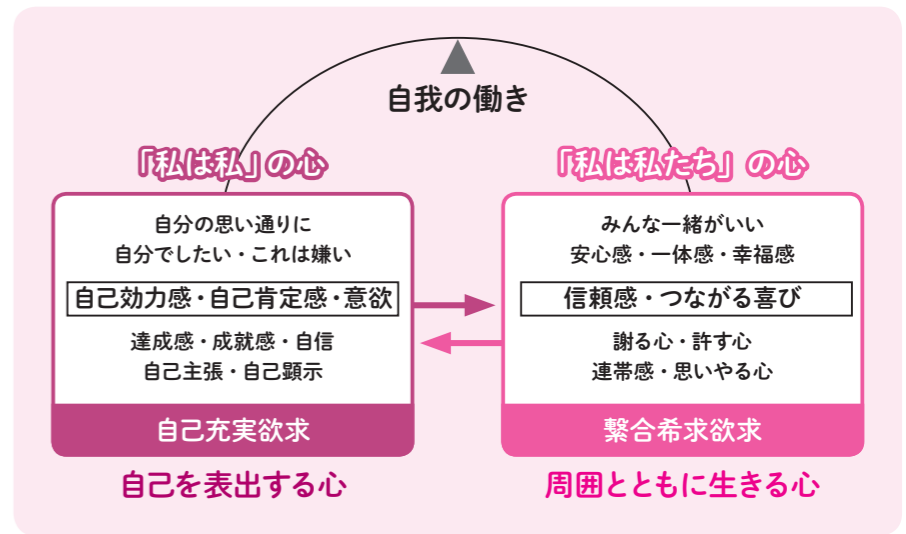
例えば、子どもたちを見ていると、グループの中でそれぞれ違う遊びをしたいと主張するシーンがよくあります。このとき、自分のしたい遊びをがまんして、どれかひとつの遊びを選ぶことができるのは、友だちと一緒にいたいという整合希求欲求が自己充実欲求に勝ったからです。子どもは、がまんしなければいけないからがまんしたのではなく、がまんすることで友だちと結びつきたいという欲求が満たされるからがまんしたのです。つまり、自分にメリットがあるからがまんできたのです。

このように考えると、集団の中で他者と折り合いをつけることができる子どもを育てるには、ただ「がまんしなさい」と保育者が言って聞かせるよりも、人とつながりたいという気持ちを強くもつように援助することが必要だとわかります。園の中で豊かな人間関係をつくるのであれば、それが一人ひとりの子どもにがまん強さを育てていくことにもつながるのです。

自己主張の強さの原因は 「人とつながりたいから」

また、自己充実欲求の強い子は、

図1 「私は私」の心と、「私は私たち」の心で主体はつくられる



「自分のことばかり考えて、周囲に気持ちが向かない子」と見られてしまうことがあります。本当にそうなのでしょうか。

自己肯定感という言葉私たちは「自分で自分を好きでいる感情」としてよく使います。こう文字にして説明すると、確かに自己肯定感には他者は存在していません。しかし、私たちは自分で自分を好きになるから満足なのではなく、実は周囲の人が認めてくれる自分だからこそ、自分のことを肯定できるのであり、実際には他者の存在が欠かせません。自己肯定感の根っこは他者にあるの

ですから、他者が認めてくれないと自己主張もできないし、自己肯定感ももてません。このことから、自己充実欲求と整合希求欲求が強く結びついていることがわかります。

わがままに見える子、自分の好き勝手なことばかりしようとする子は、やりたいことをやっているのではなく、そうしないとしかたがないというケースが多いと私は感じます。つまり、整合希求欲求が満たされていない、人としっかり結びついていないから、心にもやもやしたものを抱えて、友だちに手を出しているのではないのでしょうか。自己充実欲求に従った自己主張に見えても、実は周囲とのつながりが満たされないことによる振る舞いにすぎない場合がある、というわけです。

保育者のみなさんならばきっと、「最初から乱暴な子などいない」とお考えだと思います。乱暴なふるまいも、どこから発生しているのか、その根っこを見極めることが大切だと私も思います。その根っこがわかれば、子どもを「いけません」と規





範で押さえつけるだけではなく、むしろ子どもが不足を感じている部分を理解し、補い、「守ってあげよう」という発想になり、子どもに対する態度も変わっていくと思うのです。

まず、あるがままを受け止め、「こうなってほしい」と示す

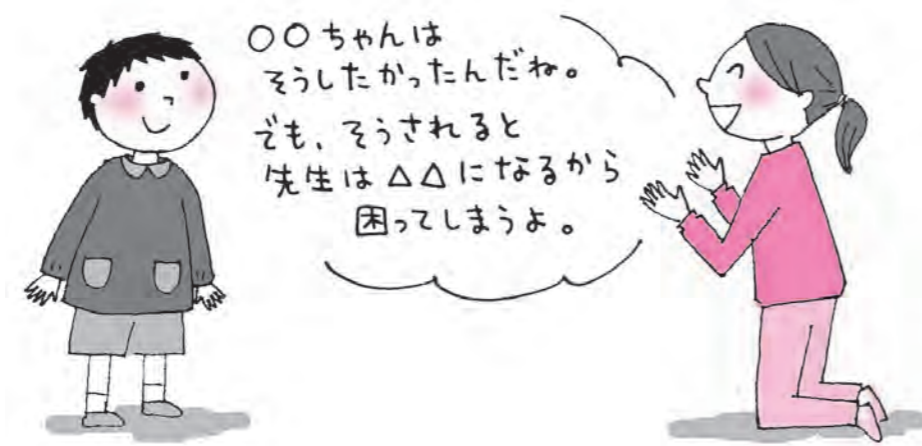
自己充実欲求と繋合希求欲求というふたつの側面を抱えた子どもの心は、ときにそのバランスを崩しながら、少しずつ成長していきます。心は、知力や体力のようにやればやっただけ成長するというものではありません。行きつ戻りつしながら、そしてプラスの感情とマイナスの感情の両面をもったまま育つのが心であり、主体性なのです。

では、子どもを主体として育むため、保育者にはどのような姿勢が求められるのでしょうか。私は、子どもを育てるふたつの柱として、「養護の働き」と「教育の働き」があると考えています(図2)。

ここで言う「養護の働き」とは、保育者が思いを受け止めたり、存在を喜んだりすることです。これはまさに子どもが親や保育者に求めているものです。そして私が思う「教育

の働き」は、保育者が子どもに「こうしてみない?」「これはやめてね」「ここまでやってみよう」と子どもに自分の願いを伝えながら導いていくことです。このふたつの働きは、幼児期から思春期、青年期まで、子どもの主体性の育成に一貫して必要なものです。

保育の現場では、「教育の働き」は比較的十分に行われています。というも、大人は自分の願いを子どもにしっかりと、ときには過剰なほど伝えているからです。しかしそれに対して、「養護の働き」は不足しがちではないでしょうか。目の前の子どもに対して、かつて子どもだった自分を思いながら「自分もきつと



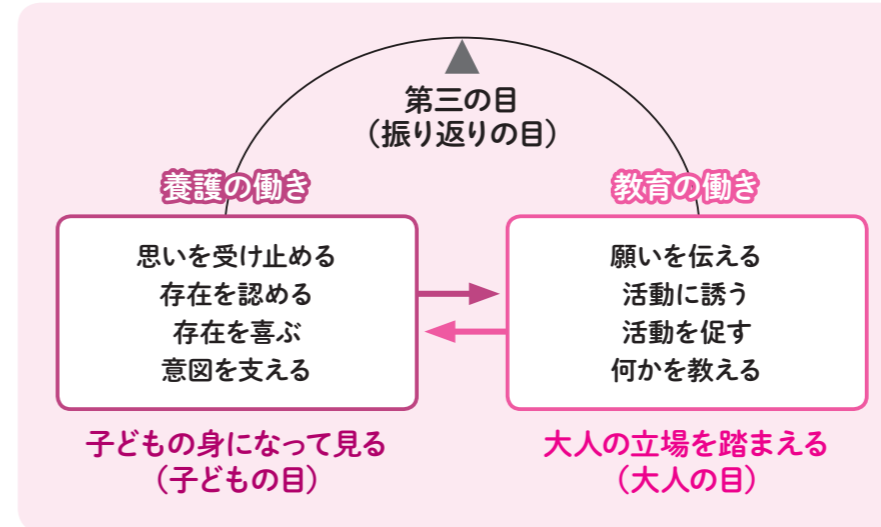
こうだったんだろうな」と子どもの今を受け止めながら、大人として子どもに寄り添うことが保育者には求められます。子どもの気持ちになって考えることは、保育者にも保護者にも必要なのです。そのうえで、大人の立場で「もっとこうするといいな」と子どものこれからに働きかけたいものです。

「ルールだからダメ」ではなく「私が困る」ことを伝える

しかし、往々にして大人は「がまんしなさい」「いけません」と子どもに言いがちです。これでは、子どもにルールを教えたいから叱っているのに、子どもはルールの大切さが理解できず、それどころか「先生(お母さん、お父さん)は私のことを嫌いになった」と考えてしまうかもしれません。

子どもの中に繋合希求欲求があること、人とつながりたいという気持ちがあるからがまんでできることを思い出してみましょう。そうすると、子どもの叱り方も変わってくるのではないのでしょうか。例えば、「いけません」ではなく、まずは子どもの

図2 主体として育むための「養護の働き」と「教育の働き」



「こうしたかった」という気持ちを受け止めたうえで、「でも、先生はいやだなあ」と伝えてみてはどうでしょうか。

「〇〇ちゃんはそうしたかったんだね」と子どもの自己充実欲求を認めたと先生は△△になるから困ってしまうよ」と、大人の側も自分が主体であることをはっきりさせて子どもに意思表示をすることが必要です。それによって、子どもの中に「大好きな先生とつながりたい」という気持ちが高まり、大人の言葉を受け止めることができるようになります。

まず、子どもが「自分の気持ちを受け止めてもらえた」と満たされた気持ちにならないと、子どもは先生の言葉を受け入れることもできず、結果、規範意識が身につけにくくなるのです。

バランスよく子どもを見る目を保育者間で育てる

「養護の働き」の根本は、子どもの存在を認める気持ちです。そして

子どもは「いい子にしてくれたらかわいい」「力がついたからかわいい」という条件つきで認めるのではなく、「あなたがそこにいるからうれしい」と思える存在です。もちろん乱暴は困るし、聞き分けがないのは困るけれど、それでも目の前の子どもは私の大切な存在であるという気持ちが保育の原点です。

だから保育者は、「養護の働き」と「教育の働き」のふたつのバランスがとれているか、チェックすることが大切です。自分の保育をエピソードに書いて、それをほかの保育者に読んでもらうなどして、自分の中のふたつのバランスを見てもらうとよいと思います。特に若い保育者は、ほかの保育者に自分の保育を

チェックしてもらうことが大切です。そうすることで少しずつ、自分の保育を客観的にチェックする「第三の目」を自分の中につくっていくことができるでしょう。

「主体性を育む」というと、完成した人間をつくるようなイメージがありますが、そうではないと思います。今ある状態を認めてもらったうえで、「もっとこうなるといい」という状態を示してもらえれば、人はみな、もっとよくなるという気持ちをもつものです。そのとき、人は主体的になれるのだと思います。

どんな子どもも「もっとよくなりたい」と思っています。しかし、心は右肩上がりに順調に成長するような単純なものではありません。そんな心の成長に、子どもを主体として認めながら、寄り添う保育者であってほしいと思います。



現場のみなさんへ

◎自分らしく、そして周囲とともに生きることが出来る人を育てることは、保育と学校教育に共通する目標です。その実現には、子どもを主体として受け止める保育者の姿勢が欠かせませんし、同時に保育者も主体として園長や同僚から受け止められることが大切です。よい保育を実現する環境をぜひつくってください。